



毛髪および爪由来の ストレスホルモン値の診断的意義

工藤 利彩 Risa Kudo 法医学／講師

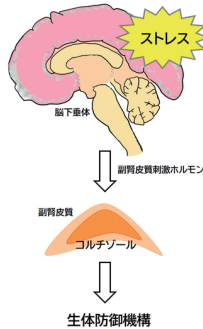
勇井 克也 Katsuya Yuui 法医学／助教



- **キーワード** ストレスホルモン、探針エレクトロスプレーイオン化質量分析計、外部環境因子
- **対象疾患** ストレス関連疾患
- **研究フェーズ** 基礎的

シーズ概要

ストレスを受けると、脳下垂体から副腎皮質刺激ホルモンが分泌され、副腎皮質からコルチゾールが放出されることにより生体防御機構が働きます。コルチゾールの血中濃度は、心理的・身体的ストレスにより上昇することから、コルチゾールは「ストレスホルモン」ともよばれています。また、先行研究により、コルチゾールは、血液のみならず、唾液や毛髪、爪からも検出が可能です。血中や唾液中のコルチゾール値は日内変動の影響を受けやすく、直近のストレスを反映しているのに対し、毛髪や爪に含まれるコルチゾールは数カ月前からのストレスを反映しており、慢性的なストレスの指標となり得ることが知られています。我々は、探針エレクトロスプレーイオン化質量分析計を用い、解剖事例における血液・毛髪および爪由来のストレスホルモン値を測定し、ストレス評価の指標としての有用性を検討しています。本研究で得られた結果は、社会における虐待や過労死の防止対策に役立つものと思われる。



Appeal Point

アピールポイント

ヘルスケア企業との共同開発により、毛髪および爪を用いた自己ヘルスチェックサービスの実用化を希望しております。

関連文献／特許

<http://legalmed.naramed-u.ac.jp/index.html>



研究成果の応用可能性

毛髪および爪を対象としたストレス評価は、法医学分野のみならず、臨床医学、社会医学に幅広く役立つものと思われる。